

ジェイムズ・ジョイスの「衣装哲学」

—『ユリシーズ』第10挿話について—

James Joyce's "Sartor Resartus" : On the Tenth Episode of *Ulysses*

田 村 章

Akira TAMURA

1. はじめに

ジェイムズ・ジョイス (James Joyce, 1882—1941) の『ユリシーズ』(*Ulysses*) 第10挿話、いわゆる "Wandering Rocks" は、冒頭から結末に至るまで、登場人物の衣服や装身具の描写に満ち溢れている。この挿話の冒頭は、"The superior, the very reverend John Conmee S. J. reset his smooth watch in his interior pocket as he came down the presbytery steps." (10.1-2)¹⁾と、修道院長のコンミー神父 (Father Conmee) が懐中時計を内ポケットに入れ直す場面の描写にはじまっている。一方、この挿話の結末では、たくさんのダブリン市民がアイルランド総督ダドリー伯 (earl of Dudley) 一行のパレードを見物する様子が描かれているが、本挿話の末尾にあたる "and the salute of Almidano Artifoni's sturdy trousers swallowed by a closing door." (10.1281-82) という箇所では、一見物人の音楽教師アルミダーノ・アルティフォニ (Almidano Artifoni) のズボンがパレードに挨拶しようとしたことが書かれている。

この挿話は、身につけている衣服や装身具によって、登場人物が詳細に描かれるという表現上の特徴を有している。このことについて、トレヴァ・ウィリアムズ (Trevor Williams) は、"In 'Wandering Rocks' the body can be reduced to its clothes merely"²⁾ と指摘し、人物が身体よりもむしろ着用している衣服の描写によって示されているのは、疎外感が漂う社会の中で、人々が互いに分断され、自分の身体までもがどこか別の場所にあるような様子を描いているのだと説明している。これは確かに正しい指摘であろう。しかしこの挿話の衣服や装身具についての詳細な言及は、アンドリュー・ギブソン (Andrew Gibson) が、"the chapter's preoccupation with clothes"³⁾ と端的に述べているように、挿話全体で終始徹底していて、挿話のいたるところで見ることができる。そのため、これらすべてを、ただ単に、「人物同士疎遠化」を表現するためということだけで説明するのは難しいように思われる。

本挿話の衣服をめぐる過剰なまでの描写は、いったい何のためなのだろうか。この問題を考えるためのヒントとなるのが、衣服を比喩として人間社会を論じたトマス・カーライル (Thomas Carlyle, 1795—1881) の諷刺的評論『衣装哲学』(*Sartor Resartus*) である。『衣装哲学』は、最初に月刊誌 *Frazer's Magazine* での連載として、1833年から1834年にかけて発

表された⁴⁾。ジョイスが『ユリシーズ』の執筆を開始するのが1914年であるので、『衣装哲学』は、それより約80年前に発表されたことになる。本稿では、カーライルのこの代表作を手がかりにして、ジョイスが第10挿話で用いた数多くの衣服への言及の意義について明らかにしたい。

2. ジョイスのテキストにおけるカーライルの『衣装哲学』への言及

ジョイスは明らかにカーライルを熟読していた。このことは、『ユリシーズ』第14挿話1391行—1439行がカーライルの文体のパロディになっていることや、『フィネガンズ・ウェイク』(*Finnegans Wake*) にしばしば現れる『衣装哲学』の引喩からも容易に想像がつく。スコット・クライン (Scott W. Klein) によると、『フィネガンズ・ウェイク』におけるカーライルの明瞭な引喩は、以下の通りである。カーライルという名前は "carlyle touch" (FW, 517.22)⁵⁾ となり、*Sartor Resartus* は "sartor's risorted" (FW, 314.17) とされている。さらに『衣装哲学』の主人公のトイフェルスドレック (Teufelsdröckh) 教授の名前は、"Tawfulsdreck" (FW, 68.21) となって現れている⁶⁾。

ヴィッキ・マハフィ (Vicki Mahaffey) は、ジョイスとカーライルの関わりを論じる際に、トイフェルスドレック教授が披露する彼の哲学を次のように解説している。

In *Sartor Resartus*, the entire purpose of Teufelsdröckh's philosophy of clothes is to demonstrate the "grand Proposition" that our earthy interests "are all hooked and buttoned together, and held up, by Clothes" (Book First, Chapter VIII). Teufelsdröckh goes on to show that the world as we know it is constituted entirely by clothes: nature, language, society all serve as "garments" for other, less tangible, realities. Such "clothes" are primary agents of connection. In social terms, "hooks and buttons" represent the possibility of communication, and even community....⁷⁾

マハフィの解説も参考にしながら、『衣装哲学』で、トイフェルスドレックが主張している衣服の役割を要約すると次の3点にまとめられる。

まず第1に、マハフィが取り上げているように、「人間のこの地上における関心事は、すべてホックやボタンをかけられ、衣服によってまとめられている」ということである。衣服は、人々をつなぎとめ、社会をつくる役割を果たしているのである。

第2に衣服が人間の魂を包み込んでいるということである。『衣装哲学』第1巻第10章でトイフェルスドレックは、

"To the eye of vulgar Logic,"..."what is man? An omnivorous Biped that wears Breeches. To the eye of Pure Reason what is he? A Soul, a Spirit, and divine Apparition. Round his mysterious ME, there lies, under all those wool-rags, a Garment of Flesh (or of Senses), contextured in the Loom of Heaven...." (51)⁸⁾

と述べ、人間の魂が肉体という衣服によって包まれ、さらに衣服に覆われていることを説明し

ている。

第3に、衣服が象徴であるということである。これについてトイフェルスドレックは、第1巻第11章で、

Hence Clothes, as despicable as we think them, are so unspeakably significant. Clothes, from the King's-mantle downwards, are Emblematic, not of want only, but of a manifold cunning Victory over Want. On the other hand, all Emblematic things are properly Clothes, thought-woven or hand-woven.... (56)

と述べ、さらに、

"Men are properly said to be clothed with Authority, clothed with Beauty, with Curses, and the like. Nay, if you consider it, what is Man himself, and his whole terrestrial Life, but an Emblem...." (57)

と続けている。トイフェルスドレックが主張する衣服の役割を一言で言えば、衣服は人間の魂を包むと同時に、人間自身を表わす象徴であり、それによって人と人とがつながり社会が築かれているということになる。

ジョイスは、第10挿話で登場人物をどのように描写しているのだろうか。カーライルの『衣装哲学』を念頭において、何名かの人物の描写を具体的に検討してみよう。

3. 『衣装哲学』とコンミー神父の描写

『ユリシーズ』第10挿話は、コンミー神父の詳細な描写にはじまる。神父は、所用のため司祭館からダブリン北東郊外のアーティンへと歩いている。彼は、道すがら様々な人々に挨拶を交わす。人物の行為が、衣服や装身具で表現されるというこの挿話の特徴は、コンミー神父の描写にまず見ることができる。例えば、神父が顔見知りの国会議員夫人に会ったあとの別れ際の挨拶は、"Father Conmee doffed his silk hat and smiled, as he took leave, at the jet beads of her mantilla inkshining in the sun." (10.30-31) と描かれ、神父が、夫人ではなく、夫人が身につけている黒玉の首飾りに挨拶する様子が示されている。

挨拶が人が着用しているものに向かってなされることは、一見、トイフェルスドレックの「衣服が人々をつなぐ」という持論を具現化しているようにも思われる。しかしながら、ジョイスのコンミー神父の描写はそれほど楽観的なものではない。マリリン・フレンチ (Marilyn French) が、"Conmee, calculating and worldly, is an aesthetic snob."¹⁹⁾ と評しているように、彼の人格には様々な問題がある。最も大きな問題は偽善性である。ジョイスは、穏やかにそして確実にコンミー神父の偽善性を暴露しながら筆を進めている。神父は、戦争で一本足となった水兵が金を無心するのに対して、祝福は与えようとはするものの、金は与えようとはしない。このことは、国会議員夫人に会う前に、すでに明らかにされている。あらかじめコンミー神父の人格の本質を知っていれば、神父の挨拶は、人々の心をつないでいるようなものではないことが判明する。トイフェルスドレックの「衣服が人々をつなぐ」という持論は、本挿話冒頭のコンミー神父の描写には、まったく当てはまらず、その結果、強烈なアイロニーを生

み出しているのである。

コンミー神父は、人種差別にも似た浅はかな考えを抱いている。彼は、黒人の扮装をした歌手のポスターから、洗礼を受けていない有色人種の人々の魂に思いを馳せ、そして彼らが地獄の落ちると信じ、そのことを哀れんでいる。

Father Conmee thought of the souls of black and brown and yellow men and of his sermon of saint Peter Claver S. J. and the African mission and of the propagation of the faith and of the millions of black and brown and yellow souls that had not received the baptism of water when their last hour came like a thief in the night. That book by the Belgian jesuit, *Le Nombre des Élus*, seemed to Father Conmee a reasonable plea. Those were millions of human souls created by God in His Own likeness to whom the faith had not (D. V.) been brought. But they were God's souls, created by God. It seemed to Father Conmee a pity that they should all be lost, a waste, if one might say. (10.143-52)

コンミー神父は、人々の魂を救済する立場にありながら、肌の中につつまれている人間の魂のあり方について誤った考えを抱いている。この箇所には、「西洋人と肌の色が異なっていればその魂も救われない」という偏見に満ちた彼の優越感を読み取ることができる。

第10挿話は、当時のダブリンの基盤となっている二つの秩序、すなわち、カトリック教会と大英帝国を、それぞれコンミー神父とダドリー総督に代表させることで、全体の枠組みが作られている。カーライルは、『衣装哲学』第3巻第2章で教会や宗教のもつ社会の基盤としての意義を重視し、トイフェルスドレックの主張を通して、次のように述べている¹⁰⁾。

"Thus was it that I said, the Church Clothes are first spun and woven by Society; outward Religion originates by Society, Society becomes possible by Religion. Nay, perhaps every conceivable Society, past and present, may well be figured as properly and wholly a Church, in one or other of these three predicaments...." (163)

カーライルは、すなわち、教会服とは社会によって織られる宗教の理念を体現するものであり、社会は宗教によって可能となるものだと主張しているのである。

ただし、同じ章の最後で、カーライルは、現代社会における教会の腐敗ぶりも指摘している。教会服は外面だけのものになっているというのである。

"Meanwhile, in our era of the World, those same Church Clothes have gone sorrowfully out at elbows: nay, far worse, many of them have become mere hollow Shapes, or Masks, under which no living Figure or Spirit any longer dwells...." (164)

カーライルは、さらに、聖職者は、えせ聖職者("Sham-priest")に墮してしまっていると指

摘している。

As a Priest, or Interpreter of the Holy, is the noblest and highest of all men, so is a Sham-priest (*Scheinpriester*) the falsest and basest; neither is it doubtful that his Canonicals, were they Popes' Tiaras, will one day be torn from him, to make bandages for the wounds of mankind; or even to burn into tinder, for general scientific or culinary purposes. (164)

ジョイスのコンミー神父の描写は、まさに偽善的な「えせ聖職者」そのものであると言えるのではないだろうか。

4. 洒落者と貧困者

カーライルは、『衣装哲学』の第3巻第9章から最終章にかけて、社会批判をさらに展開させていく。そのときに、貧富の格差を、洒落者(Dandy)と、特にアイルランドの貧困者によって代表させて、鮮明に描いている。第3巻第10章の冒頭でカーライルは、洒落者を次のように定義している。

FIRST, touching Dandies, let us consider, with some scientific strictness, what a Dandy specially is. A Dandy is a Clothes-wearing Man, a Man whose trade, office, and existence consists in the wearing of Clothes. Every faculty of his soul, spirit, purse, and person is heroically consecrated to this one object, the wearing of Clothes wisely and well: so that as others dress to live, he lives to dress. (207)

この引用のあとで、カーライルは、"Lord Herringbone may dress himself in a snuff-brown suit, with snuff-brown shirt and shoes" (208), すなわち「おしゃれ貴族は、背広と、ワイシャツや靴を同じ黄茶色に揃えて、おしゃれ振りを見せるかもしれない¹¹⁾」と述べているが、このような典型的な洒落者が『ユリシーズ』第10挿話で数名登場している。

最初に、移動中のコンミー神父の描写の中に、一時的に挿入されているダンス教師のデニス・マギニ(Denis Maginni)を見てみよう。

Mr Denis J. Maginni, professor of dancing &c, in silk hat, slate frockcoat with silk facings, white kerchief tie, tight lavender trousers, canary gloves and pointed patent boots, walking with grave deportment most respectfully took the curbstone as he passed lady Maxwell at the corner of Dignam's court. (10.56-60)

オスカー・ワイルド(Oscar Wilde)も好んだという黄色の手袋やエナメル靴など、いかにもダンディという姿の過剰なまでの描写は、一人の人物を人柄や内面ではなく、衣服で表象するという、この挿話の特徴を端的に表している。黄色は、当時の洒落者が好んだ色なのであろう。貧乏な文学青年スティーヴン・ディーダラス(Stephen Dedalus)の裕福な友人であるマラカイ・マリガン(Malachi Mulligan)も"primrose waistcoat" (10.1065)とあるように黄色

いベストを着用している。

この日に、主人公レオポルド・ブルーム (Leopold Bloom) の妻のモリー (Molly) と浮気をするヒュー・ボイルン (Hugh Boylan) も正真正銘の洒落者である。彼も新しい黄褐色の靴を履いている。彼は "got up regardless" (10.330), すなわち金に飽かして着飾っているのである。

このような本物の洒落者の模倣をしている人物もいる。その代表が紅茶輸入商会の社員であるトム・カーナン (Tom Kernan) である。彼は、お気に入りの中古のフロックコートを身にまとして、"Dress does it. Nothing like a dressy appearance." (10.738-39), 「正装が物を言うのさ。まっとうな身なりにまさるものなしだ」²⁾ と心の中で呟き、外見を絶えず気にしながらダブリンの通りを闊歩している。この日は、ダブリン総督のパレードがあり、多くの人々が上流階級の豊かな暮らしぶりを一目見ようとしている。それと同時に、人々は、自分や他人のファッションを過剰なまでに意識している。このことは、あまり裕福ではない者にもあてはまる。貧しい弁護士で歌手のベン・ドラード (Ben Dollard) は、たるんだモーニングとだぶだぶのズボンをはいて、気取って歩いている。そして、服装をスティーヴンの父親のサイモン・ディーダラス (Simon Dedalus) に冷かされると、"I threw out more clothes in my time than you ever saw." (10.911-12), 「景気のいいときには、たくさんの服を着古したものだ」と応えている。

裕福な洒落者とは対照的なのがアイルランドの貧困者である。カーライルは、『衣装哲学』第3巻第10章で、彼ら貧困者について、次のように説明し、19世紀初期のイギリス人が抱いたアイルランド人に対するステレオタイプを提示する。

...in England they are generally called the *Drudge* Sect; also, unphilosophically enough, the *White Negroes*; and, chiefly in scorn by those of other communions, the *Ragged-Beggar* Sect. (212)

ここでは、アイルランドの貧民たちが "the *White Negroes*" (「白色黒人」) や "the *Ragged-Beggar* Sect" (「ぼろ布乞食宗」) と呼ばれている。さらに、カーライルは、同じく第10章で、アイルランド貧民の生活実態について、旅行者の手記の引用という形で詳細に描いている。

'The furniture of this Caravansera consisted of a large iron Pot, two oaken Tables, two Benches, two Chairs, and a Potheen Noggin. There was a Loft above (attainable by a ladder), upon which the inmates slept; and the space below was divided by a hurdle into two Apartments: the one for their cow and pig, the other for themselves and guests. On entering the house we discovered the family, eleven in number, at dinner: the father sitting at the top, the mother at bottom, the children on each side of a large oaken Board which was scooped out in the middle, like a Trough, to receive the contents of their Pot of Potatoes. (215)

『ユリシーズ』第10挿話では、アイルランドの様々な貧民が登場している。物乞いをする一本足の水兵や、だぶだぶの服を着ているベン・ドラード、ブルームが古書を物色する古本屋の店

主などである。中でも、特にディーダラス家の貧困さは、多面的かつ具体的に描かれている。サイモン・ディーダラスは、競売場の周囲をうろついている。当時は、家財道具を質に入れることが、数日分の生活費を稼ぐ手段になっていたが、それはその家の凋落を示す行為であった¹³⁾。そして、ディーダラス家では、娘ケイティ (Katey) が本を質に入れようと質店に行くものの、お金を貸してもらえず、困っている。家には十分な食べ物がなく、子どもたちは、ひもじい思いをしている。鍋の中でゆでられているのは、食べ物ではなく、おそらく熱湯消毒中のシャツなのである。

カーライルは、『衣装哲学』で、えせ聖職者、洒落者、アイルランドの貧困者という類型的な人物を提示したが、ジョイスは、それらを第10挿話で具体的な登場人物として描写したと言える。

5. 象徴としての衣服

すでに述べたように、『衣装哲学』の重要な考え方の一つが、「上は帝王の外套をはじめとして、衣服というものは、象徴である。…あらゆる象徴的事物は、思想で織られたにせよ、手で織られたにせよ、本来からいうと衣服である」という考え方である。これは、「人間は、権威、美、呪詛その他を、衣服としてまとっているといわれるが、正しくその通りである。いや考えてみれば、人間そのもの、および人間の地上生活全体も、象徴以外のなんであろうか」という見方に発展していく。以上の考え方は、『衣装哲学』第1巻第9章の次の箇所に、集約的に示されている。

"Thinking reader, the reason seems to me twofold: First, that *Man is a Spirit*, and bound by invisible bonds to *All Men*; Secondly, that *he wears Clothes*, which are the visible emblems of that fact. Has not your Red, hanging individual, a horsehair wig, squirrel skins, and a plush gown; whereby all mortals know that he is a JUDGE?—Society, which the more I think of it astonishes me the more, is founded upon Cloth. (48)

ジョイスが描いた『ユリシーズ』第10挿話では、いたるところで身につけた衣服の描写によって登場人物が描かれており、そうすることで、人間と衣服、人間と象徴の関係が前景化されている。その結果、カーライルの上記の考え方をより具体的に提示しているものとして読み取ることができる。

そのわかりやすい例の一つが、父親を亡くしたばかりのディグナム坊や (Master Dignam) の描写である。慣れない喪服を身につけているが、それだけで、喪中であることを表わす "visible emblem" になっているのは、自明のことである。ディグナム坊やは、街中の婦人洋品店の窓の中に、二人のボクサーのポスターと一人の喜劇女優のポスターを目にしている。ポスターに描かれた肖像自体、生身の人間をその代理となる表象にしてしまうものであるが、この洋品店の窓の中にはさらに鏡が二つあり、その鏡にディグナム坊やが映ることで、彼自身も表象化されている。

Master Dignam on his left turned as he turned. That's me in mourning. When

is it? May the twentysecond. Sure, the blooming thing is all over. He turned to the right and on his right Master Dignam turned, his cap awry, his collar sticking up. Buttoning it down, his chin lifted, he saw the image of Marie Kendall, charming soubrette, beside the two pluckers. (10.1137-42)

衣服のように人間の周囲にある象徴や表象と関連して、カーライルがトイフェルスドレックの哲学を通して提示する衣装哲学の要点を、向井清は、次のように解説している。

精霊としての人間の背後には宇宙を統括する神がいる。人間を含むすべての自然界は神の顕現なのである。したがって、衣装哲学とは、宗教思想を文学的に表現したメタファーであって、衣装の奥底にある不可視の真実体を見抜くだけの洞察力を要する学問である¹⁰⁾。

カーライルは、社会が衣装という象徴によって、築かれていることを指摘する一方で、その背後にある真実を見抜くことの重要性も指摘しているのである。

『ユリシーズ』第10挿話の登場人物は、衣服や装身具といった象徴をめぐる、その態度が二分される。ボイランやカーナンのように衣服で表面を被うことに夢中になる人物とスティーヴンのように、象徴の背後にある真実を読み取ろうとする人物である。スティーヴンのこのような姿勢は、第3挿話の冒頭など『ユリシーズ』の様々な箇所で見られるが、第10挿話では、次の箇所がわかりやすい。

Stephen Dedalus watched through the webbed window the lapidary's fingers prove a timedulled chain. Dust webbed the window and the showtrays. Dust darkend the toiling fingers with their vulture nails. Dust slept on dull coils of bronze and silver, lozenges of cinnabar, on rubies, leprous and winedark stones.

Born all in the dark wormy earth, cold specks of fire, evil, lights shining in the darkness. Where fallen archangels flung the stars of their brows. Muddy swine-snouts, hands, root and root, gripe and wrest them. (10.800-07)

この箇所では、スティーヴンは、宝石を装身具として捉えるよりも、それが地中に埋もれた石であったという本来の姿に目を向けている。これらの石は人間によって高価な価値を付与された結果、宝石と呼ばれるようになったのである。このように、スティーヴンは目に見えるものの背後に潜んでいる真の姿を真摯に読み取ろうとしている。こうした彼の姿勢は、コンミー神父の「肌の色が黒や茶や黄色」であれば、「その魂は地獄に落ちる」と短絡的に考える姿勢とは正反対である。ただし、スティーヴンが、カーライルのように、目に見える象徴の背後に、不可視の真実体として宇宙を統括する神を見出したかと言えば、そうではない。この点が19世紀初期を生きたカーライルと彼のおよそ90年後を生きたジョイスの根本的な相違点となる。

6. 『衣装哲学』と『ユリシーズ』の対比と類似

トイフェルスドレックは、『衣装哲学』で「社会は服地を基礎にして築かれている」という説を強調している。本稿の前節のはじめの引用に加えて、第1巻第8章では、次のようにも述

べたとされている。

He says in so many words, "Society is founded upon Cloth;" and again, "Society sails through the Infinitude on Cloth, as on a Faust's Mantle, or rather like the Sheet of clean and unclean beasts in the Apostle's Dream; and without such Sheet or Mantle, would sink to endless depths, or mount to inane limbos, and in either case be no more." (41)

ここで、カーライルは、「社会は服地を基礎にしている、服地がなければ、社会は無限の深みに沈む」と述べている。このように考えるカーライルは、人間の背後には宇宙を統括する神の存在を確信していた。

ジョイスが描く『ユリシーズ』の世界では、このような神の存在を見出すことは難しい。第10挿話で、極貧の生活が描かれているディーダラス家の娘のブーディ (Boody) は, "Our father who art not in heaven" (10. 291) と呟いている。兄のステイーヴンは、すでに第9挿話で次のように述べていた。

...the church is founded and founded irremovably because founded, like the world, macro and microcosm, upon the void. Upon incertitude, upon unlikelihood. (9. 840-42)

この引用は、カーライルの "Society is founded upon Cloth" という主張と、内容においても表現においても鮮やかな対照を示している¹⁵⁾。それでは、神も救いもなかなか見出すことができない『ユリシーズ』の世界に希望はあるのだろうか。

第10挿話には、以上に述べてきたもの以外にも、衣服や装身具についての多数の言及がある。それは、この挿話に現れる歴史的な事件や他の文学作品にも及んでいる。例えば、1534年にダブリンで起こった大規模な反英レジスタンスである「絹衣のトーマス (Silken Thomas) の乱」への言及 (10.407-09) があるが、この反乱の名称は、トーマスの家来の武装兵が絹の縁取りをした上着を着用していたことに由来している¹⁶⁾。他の文学作品への言及の代表例は、ボイランの秘書でタイピストのミス・ダン (Miss Dunne) が図書館から借りているウィルキー・コリンズ (Wilkie Collins) 作の『白衣の女』(*The Woman in White*) への言及 (10.368-72) であるが、ここでは作品の題名を含めた作品自体が衣服への言及になっている。

『ユリシーズ』の第10挿話で主人公のレオポルド・ブルームは、妻のために行商の古本屋で猥本を探す様子が描かれている。彼の姿は、きらびやかな洒落者達とは対照的に、極めて控えめに描かれており、単なる "A darkbacked figure" (10.520-21) として、この挿話に登場する。彼が選んだのは、『罪の甘い歓び』(*Sweets of Sin*) という本で、そのとき偶然開けたページには次のように書かれていた。

—All the dollarbills her husband gave her were spent in the stores on wondrous gowns and costliest frillies. For him! For Raoul! (10.608-09)

ここに描かれているのは、夫を欲情させるためにガウンや下着に凝る妻の姿である。『ユリシーズ』第10挿話では、衣服について多くの言及があるものの、カーライルの述べた「衣服が人々をつなぐ」様子は描かれなかった。それをあえて見出すとすれば、下着によって欲情する男女の姿が描かれている『罪の甘い歓び』からのこの引用中である。この猥本の意義について、クライヴ・ハート (Clive Hart) は、次のように指摘している。

Sweets of Sin was the goal for the outward journey. There is still the return to be negotiated, the return to contact with physical circumstances and to mastery of the urban consciousness. Here, in 'Wandering Rocks', we are given our one general view of the peripheral world with which Bloom now seeks to be reunited. It is, of course, a human world, an abrasive and self-contradictory society¹⁷⁾.

人と人とが真の心の結びつきを持つことのできないダブリンで、ブルームが唯一救いの場を求めるとすれば、それは妻のモリーとの関係の修復においてである。『罪の甘い歓び』は、ブルームにとって、妻との関係を取り戻すための唯一の手段なのである。

これまで、『ユリシーズ』の第10挿話を中心に『衣装哲学』との関連性を考察してきたが、『ユリシーズ』全体に目を向けて、さらに二つの重要な関連を指摘しておきたい。一つは、『衣装哲学』の主人公のトイフェルスドレック教授は、『ユリシーズ』の主人公のレオポルド・ブルームといくつかの共通点を有していることである。二人とも、住んでいる街のアウトサイダーで、どことなく謎めいた人物である。『衣装哲学』の第1巻第3章で、トイフェルスドレックの人物像は、次のように詳しく説明されている。

He [Teufelsdröckh] was a Stranger there, wafted thither by what is called the course of circumstances; concerning whose parentage, birthplace, prospects or pursuits, Curiosity had indeed made inquiries, but satisfied herself with the most indistinct replies.... Wits spoke of him secretly as if he were a kind of Melchizedek, without father or mother of any kind; sometimes, with reference to his great historic and statistic knowledge, and the vivid way he had of expressing himself like an eye-witness of distant transactions and scenes, they called him the *Ewige Jude*, Everlasting, or as we say, Wandering Jew. (14)

この引用では、トイフェルスドレックは、メルキゼデク (Melchizedek) という旧約聖書「創世記」に出てくる祭司にたとえられ、さらに "Wandering Jew" と呼ばれている。このことは、レオポルド・ブルームにも全く同様にあてはまる。第9挿話で、マリガンは、ハンガリー系ユダヤ人のブルームのことを "The wandering jew" (9.1209) と呼んでいる。そして、第17挿話では、ブルームのこの日の昼食について "the unsubstantial lunch (rite of Melchisedek)" (17.2047) と記されているのである。

もう一つの注目すべき関連性は、『衣装哲学』にとっても『ユリシーズ』にとっても「幸福な家庭」が、たいへん重要であるということである。向井清は、カーライルの『衣装哲学』執筆直前の心境は、1829年に書かれた「我が家」("My Own Four Walls") という詩に書かれ

ていると説明している¹⁸⁾。7つのスタンザからなるこの詩の第3スタンザで、妻と家庭を得た喜びが次のように描かれている。

A home and wife I too have got,
A hearth to blaze whate'er befalls!
What needs a man that I have not
Within my own four walls?¹⁹⁾

一方『ユリシーズ』の主人公であるブルームも、かつてはカーライルと同様に家庭の幸福感を味わっていた。第8挿話では、彼がかつて西ロンバート通りに住んでいた頃、妻モリー、娘ミリー (Milly) と共に最も幸福な時期を味わっていたときのことを回想する様子が描かれている。

Happy. Happier then. Snug little room that was with the red wallpaper.
Dockrell's, one and ninepence a dozen. Milly's tubbing night. American soap I
bought: elderflower. Cosy smell of her bathwater. Funny she looked soaped all
over. Shapely too. (8.170-73)

ブルームが、『罪の甘い飲み』を妻に提供しようとしているのは、何とか再び幸福な家庭を取り戻せないかと模索しているからなのである。カーライルが「幸福な家庭」の満足感を味わっている中で、『衣装哲学』の内容を育んでいったのに対し、『ユリシーズ』の主人公を通して描かれる重要なテーマが「幸福な家庭」を取り戻すことであるという点は、たいへん興味深い。「幸福な家庭」は、『衣装哲学』の出発点であり、そして『ユリシーズ』のゴールとして探し求められている場所なのである。

7. むすび

以上のように、『衣装哲学』と『ユリシーズ』の間には様々な共通点や関連性が認められる。『ユリシーズ』のとりわけ第10挿話は、衣服や装身具に関するおびただしい数の言及があるだけでなく、内容の上での共通点や対照的な点があまりに多い。こうしたことから、第10挿話は、"Society is founded upon Cloth" という理念に基づいて書かれた『衣装哲学』を換骨奪胎しようとしたものだと考えられるのではないだろうか。ここで注目すべきは、カーライルは人と人をつなげるような服地とその背後にある神の存在を確信していたが、ジョイスが描くダブリンにはこうしたものを見出すことは極めて困難であったということである。このことは、第10挿話における両作品の対比の中で、はっきりと浮かび上がってくるように思われる。

第10挿話には、『衣装哲学』および著者のトマス・カーライルに関する直接の言及はない。しかしそれに近いものを見つけたことはできる。トム・カーナンがリフィ河にかかる主要な橋の一つであるオコーネル橋 (O'Connell Bridge) を「カーライル橋」と間違えている箇所である。ここでは、トマス・カーライルの "Carlyle" とは異なったスペリングで "Carlisle bridge" (10.747) と書かれている。ただし、この間違いについて、マーゴット・ノリス (Margot Norris) が、次のように述べていることは、注目に値する。

Kernan's anachronistic name for O'Connell bridge as "Carlisle bridge" may conceal a reference to Thomas Carlyle, whose *Sartor Resartus* uses the trope of clothes to conduct a philosophical critique of social symbols and institutions.²⁰⁾

我々がこれまで見てきたことから、「カーライル橋」にトマス・カーライルへの言及を読み取ろうとするノリスの指摘は全局的を射たものであると言えよう。

注

- 1) 『ユリシーズ』のテキストには、James Joyce, *Ulysses* (New York: Random House, 1986)を用い、括弧内にこのテキストからの引用の挿話番号と行番号を示した。
- 2) Trevor Williams, "'Conmeeism' and the Universe of Discourse in 'Wandering Rocks,'" *James Joyce Quarterly* 29.2 (1992): 272.
- 3) Andrew Gibson, "Macropolitics and Micropolitics in 'Wandering Rocks,'" *Joyce's "Wandering Rocks,"* ed. Andrew Gibson and Steven Morrison, *European Joyce Studies* 12 (Amsterdam: Rodopi, 2002) 38.
- 4) 『衣装哲学』の出版の経緯については、向井清『衣装哲学の形成—カーライル初期の研究—』(山口書店, 1987) 77-79を参照。
- 5) 『フィネガンズ・ウェイク』のテキストには、James Joyce, *Finnegans Wake* (London: Faber, 1975)を用い、括弧内の "FW," のあとに、このテキストからの引用の頁番号と行番号を示した。
- 6) Scott W. Klein, *The Fictions of James Joyce and Wyndham Lewis: Masters of Nature and Design* (Cambridge: Cambridge UP, 1994) 162-63.
- 7) Vicki Mahaffey, *Reauthorizing Joyce* (Gainesville: UP of Florida, 1995) 162-63.
- 8) 『衣装哲学』のテキストには、Thomas Carlyle, *Sartor Resartus*, Oxford World's Classics (New York: Oxford UP, 1987)を用い、括弧内にこのテキストからの引用の頁番号を示した。なお、本テキストからの引用では、トイフェルスドレックのセリフなどの引用で段落がはじまる場合があり、そのため独立引用の場合でも引用符をつけた場合があることを断っておきたい。
- 9) Marilyn French, *The Book as World: James Joyce's Ulysses* (Cambridge, Mass.: Harvard UP, 1976) 119.
- 10) 向井清によれば、トイフェルスドレックはカーライルの理念を吐露するための伝達媒体として作り出された。向井清『カーライルの人生と思想』(大阪教育図書, 2005) 92-93を参照。
- 11) 本文中で用いた『衣装哲学』の日本語訳には、『カーライル選集I 衣服の哲学』宇山直亮訳(日本教文社, 1962)を使わせていただいた。
- 12) 本文中で用いた『ユリシーズ』の日本語訳には、『ユリシーズI』丸谷才一、永川玲二、高松雄一訳(集英社, 1996)を使わせていただいた。
- 13) Andrew Gibsonは、これについて "The auction, by contrast, (as featured in "Wandering Rocks"), was a sign that an individual or family was definitively on the slide." と説明している。Gibsonによる前掲論文39を参照。
- 14) 向井清『カーライルの人生と思想』100-01.
- 15) スティーヴンのセリフである "the church is founded... upon the void" という箇所は、イエスがペテロに述べたとされる "And I say unto thee, that thou art Peter, and upon this rock I will build my church" (Matthew 16:18) に基づいている。カーライルの "Society is founded upon Cloth" という箇所は、聖書とジョイスの両方との関係でたいへん興味深い。
- 16) 「絹衣のトーマスの乱」については、波多野裕造『物語アイルランドの歴史』(中公新書, 1994) 95-97

を参照。

17) Clive Hart, "Wandering Rocks," *James Joyce's Ulysses: Critical Essays*, ed. Clive Hart and David Hayman (Berkeley: U of California P, 1974) 187.

18) 向井清『カーライルの人生と思想』97-98.

19) Alexander Carlyle, ed., *The Love Letters of Thomas Carlyle and Jane Welsh*, vol. 2 (1909; New York: AMS Press, 1976) 355. 念のため、向井清による日本語訳を掲げておく。

私も家と妻をもらった
降りかかる不運のすべてを燃やす暖炉もだ
これ以上何を求めることがあろうか
我が家にいると

(向井清『カーライルの人生と思想』97-98)

20) Margot Norris, *Suspicious Readings of Joyce's Dubliners* (Philadelphia: U of Pennsylvania P, 2003) 210.

参考文献

Carlyle, Alexander, ed. *The Love Letters of Thomas Carlyle and Jane Welsh*. 2 vols. 1909. New York: AMS Press, 1976.

Carlyle, Thomas. *Sartor Resartus*. Oxford World's Classics, New York: Oxford UP, 1987.

French, Marilyn. *The Book as World: James Joyce's Ulysses*. Cambridge, Mass.: Harvard UP, 1976.

Gibson, Andrew. "Macropolitics and Micropolitics in 'Wandering Rocks.'" *Joyce's "Wandering Rocks."* Ed. Andrew Gibson and Steven Morrison. *European Joyce Studies* 12. Amsterdam: Rodopi, 2002. 27-56.

Gifford, Don, and Robert J. Seidman. *Ulysses Annotated*. 2nd ed. Berkeley: U of California P, 1988.

Hart, Clive. "Wandering Rocks." *James Joyce's Ulysses: Critical Essays*. Ed. Clive Hart and David Hayman. Berkeley: U of California P, 1974. 181-216.

Klein, Scott W. *The Fictions of James Joyce and Wyndham Lewis: Masters of Nature and Design*. Cambridge: Cambridge UP, 1994.

Joyce, James. *Finnegans Wake*. London: Faber, 1975.

---. *Ulysses*. New York, Random House, 1986.

Mahaffey, Vicki. *Reauthorizing Joyce*. Gainesville: UP of Florida, 1995.

Norris, Margot. *Suspicious Readings of Joyce's Dubliners*. Philadelphia: U of Pennsylvania P, 2003.

Williams, Trevor. "'Conmeeism' and the Universe of Discourse in 'Wandering Rocks'" *James Joyce Quarterly*. 29.2 (1992): 267-79.

波多野裕造『物語アイルランドの歴史』中公新書, 1994.

向井清『衣装哲学の形成-カーライル初期の研究-』山口書店, 1987.

---. 『カーライルの人生と思想』大阪教育図書, 2005.

---. 『トマス・カーライル研究—文学・宗教・歴史の融合—』大阪教育図書, 2002.

結城英雄『「ユリシーズ」の謎を歩く』集英社, 1999.